

# 播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖  
☎079(435)5000



▲古宮の獅子舞

## エピソード七

## 380年続く古宮の獅子舞

10月の第3土・日曜日(今年は15・16日)は、古宮住吉神社の秋祭りです。秋祭りでは、布団屋台が村の中を練り歩き、太鼓の音や威勢のよいかけ声が、村中に響き渡ります。かけ声は、「太鼓の歌」を歌ったもので、上の句と下の句からできています。

乗り子の子どもが歌う上の句は、「汐騒響く播磨灘 狂乱怒涛友として綱引く腕も赤銅に若き日本の魁に自治の光も今里の」などで、海に生きる漁師の姿を力強く歌ったものです。子どもたちには難しい内容ですが、自然に口から出るようになるまで練習するそうです。歌の中に出てくる「今里」は、古宮村の大庄屋で新井を開削した今里傳兵衛のことです。担ぎ手が歌う下の句は、「古宮の浦の朝ぼらけ ゆられ波間の浮沈み 照らす朝日に身は踊る 報ずる気魄 浜田彦」などで、「浜田彦」は新聞の父と称される浜田彦蔵(ジョセフ・ヒコ)のことです。歌の作者は不明ですが、秋祭りで毎年歌われ、語り継がれています。

また、秋祭りでは、獅子舞が奉納されます。獅子舞は、寛永11(1634)年、古宮講の伊勢太神楽と

して榎木大明神(現「古宮住吉神社」東隣)に奉奏(お囃子で舞う)したのが始まりだといわれています。それ以来、地域の人々によって受け継がれてきた獅子舞は、昭和57年3月に無形民俗文化財として町の指定を受け、現在まで伝えられています。

獅子舞は、10演目からなり、獅子だけが舞う神事の3演目と法被をまとった「つり子」と呼ばれる子どもが獅子と舞う7演目から成っています。つり子と獅子が舞う演目には、歌舞伎の名場面を舞った「勘平」、しのだの森に住む超能力をもつ狐と獅子の知恵比べ、化かし合いを舞った「狐」、病床の親が季節はずれの竹の子を食べたいと言ったので、雪の中、竹の子を掘る孝行物語を舞にした「二十四孝」、汐を汲むかわいい少女と獅子の織りなす優雅な美しい舞の「汐汲み」などがあります。動きの早い遅い以外は、なかなか見分けがつかず、ほとんど同じように見える獅子舞も、よくみると多彩で奥深い内容が演じられています。

古宮の獅子舞が、これからも地域の人々の熱き思いによって、様々な困難を乗り越え、伝承されていくことを願っています。

### 町の人口 9月1日現在

(住民基本台帳人口+外国籍人口)  
34,415人(-3人) 男...16,874人(-2人) 女...17,541人(-1人) 世帯数...13,840(+7)